

その感動を、わからあう。

Asahi
SOFT DRINKS

「品質管理セミナー入門コース(略称 QC 入門)」 派遣企業インタビュー アサヒ飲料株式会社 様

「設計開発段階で品質を作り込むのに、QC入門コースが役に立っています！」

アサヒ飲料株式会社は、お客様に信頼される「安全、安心でおいしいモノづくり」を通じて「元気」「楽しさ」「健康」をお届けし、お客様の豊かな生活シーンづくりに貢献する企業を目指しています。



1884 年の瓶詰め天然炭酸水「平野水」から始まり、国民的炭酸飲料「三ツ矢サイダー」、日本最古の乳酸菌飲料「カルピス」、コーヒーの「ワンダ」、ブレンド茶の「アサヒ 十六茶」、ロングセラー炭酸水「ウィルキンソン」、ミネラルウォーターを中心とする「アサヒ おいしい水」など、130 年以上の歴史とともに、長く愛され続けているロングセラー商品を生み出しています。

この優れた商品開発力を支える一つの要因として、技術者への継続的な教育があります。その中でも、日科技連主催「品質管理セミナー入門コース」（※以下、QC 入門コースと記します）には、毎年多数の技術者を派遣され、その研修内容は、品質管理はもちろん研究開発に活かされています。

教育は継続が重要であると言われておりますが、同社を訪問し、同社の品質に対する考え方、継続的な技術者教育と QC 入門コースへのご派遣についてお話を伺ってきました。是非、多くの企業の方々にお読みいただき、参考にいただければと思います。

（聞き手：日本科学技術連盟 鈴木 健二） インタビュー：2017 年 7 月



インタビューにご協力いただいた皆様

左から

研究開発本部 研究開発戦略部 研究企画グループ 副課長 谷口 浩一 様
研究開発本部 商品開発研究所 商品開発第二グループ 副主任 松岡 修平 様
研究開発本部 商品開発研究所 商品開発第一グループ 副主任 谷 実歩 様
研究開発本部 技術研究所 生産技術グループ 副主任 宮田 哲明 様
研究開発本部 技術研究所 生産技術グループ 主任 伊藤 悠太 様

「人が財産」「アサヒバリュー」の考え方

聞き手：御社は、創業 130 年以上の歴史をもつ老舗の飲料メーカーでいらっしゃいます。「三ツ矢サイダー」や「カルピス」といった、誰もが知っているロングセラー商品をはじめ、多種にわたる飲料を開発・生産されています。御社での品質管理・商品開発への取り組みをお聞かせください。

谷口様：弊社では、安全・安心かつ差別優位性の高い商品をご提供するために、現場での品質管理を徹底し、変化していく顧客ニーズを捉えるべく、開発活動に取り組んでいます。

また生産系部門のみの活動ではございますが、「現場力向上活動」といたしまして、身近な問題をテーマに全社的に改善活動を展開しています。一定の期間で発表会を行い、最終的には本社で報告を行います。年間を通じてこの活動を行っており、社員の評価と結びついていますので、改善ができた社員の評価は上がります。

聞き手：全社的に改善活動を展開され、改善の成果を出された方をきちんと評価されているのは素晴らしいですね。さすが 130 年の歴史をお持ちの会社だと感じました。改善活動のほかに、御社では人財育成・技術者教育についてどのような取り組みをされていますか。

谷口様：私共研究開発本部においては、職制や資格に合わせて研修プログラムを作成して、人財育成を推進しています。また、弊社には「アサヒバリュー」という行動指針があり、会社の成長を牽引する主役は「社員」であり、「人が財産である」という考え方に基づいて人材育成を行っています。



谷口 浩一 様

品質は、商品開発や設計段階で作り込む

聞き手：それでは、ただ今のお話にあった研修プログラムや、「アサヒバリュー」の考え方に基づいて、私共のQC入門コースに長年にわたり継続のご派遣を頂いているわけですね。

谷口様：そうです。研修プログラムの中にQC入門コースも含まれており、主に入社2～3年目の若手の社員を中心に、統計の基礎学習という位置付けで派遣しています。

また弊社では、ものづくりにおいて、商品開発や設計段階で品質を作り込むという考え方があります。

毎年、QC入門コースに10名程度派遣していますが、研究開発部門からの派遣が多いのはそのためです。

参加のきっかけ、それは・・・

聞き手：本日お集まりいただきました皆様は、私共のQC入門コースのご卒業生でいらっしゃいます。皆様に、研修へのご参加のきっかけをお伺いしたいのですが、谷口様からお話のあった研修プログラムの計画によるものでしょうか。

伊藤様：私と宮田は同じ部署ですが、部署内には年間の教育計画がありまして、QC入門コースやその他の上級者向けコースを受講することになっています。

谷口様：弊社の研究開発本部は、技術研究所と商品開発研究所、研究開発戦略部に分かれます。各部署とも幾つかのグループがありますが、各グループのリーダーに対して、メンバーから何名を研修に派遣したいか、希望を聞いて計画を立てています。



伊藤 悠太 様

聞き手：それでは宮田さんも、グループリーダーからの打診で受講を決められたのでしょうか。

宮田様：研究開発本部に入って1～2年の時に、しっかりと基礎を学ぶ意味でQC入門コースの受講を上司から勧められましたが、最終的には自分から受講したいと伝えました。

聞き手：ご自分の意思で受講を決めたのは素晴らしいですね。谷さんはいかがでしょうか。

職場では、統計的品質管理の知識が必須です！

谷様：私の所属する商品開発研究所では、歴代の先輩方が入社1～2年の時に受講してきた歴史があります。毎年、上司から入社1～2年の者に対して研修の案内がありますし、先輩からも研修の内容が役に立つと聞かされていました。それが受講のきっかけです。



宮田 哲明 様

聞き手：これだけ職場でQC入門コースへの派遣が徹底されていると、日常的に統計の専門用語が使われているのではないのでしょうか。受講される前に、先輩が話している統計の言葉が難しいと感じたことはありますか。

谷様：入社してすぐのOJTでは、一人の先輩について仕事を学んでいくのですが、先輩が話す「有意差※」については大学でもしっかり習ったことがなく、その本質がよく分かっていませんでした。先輩から入門コースのテキストを見せてもらい、「今度受講する研修で習うよ」と教えてもらいました。

※有意差：偶然や誤差で生じた差ではなく、統計的に見て意味のある差のこと。

聞き手：なるほど。松岡さんも同じ部署ですよ。先輩の影響は大きいですか。

松岡様：はい。私も谷と同じ商品開発の部署ですので、上司から研修の案内がありました。周りの先輩方も、ほぼ全員が卒業生です。先輩とのヒアリングで、業務に活かせる研修内容だと聞きましたので、受講いたしました。



谷 実歩 様

QC入門コースで学んだ知識は、開発業務で役立っています ーデータを分析、判断する力

聞き手：QC入門コースにご派遣頂いている会社の中で、飲料メーカーはごく少数です。その中でも、研究開発部門の方は少ないです。そこでお伺いしたいのは、本コースで学習された内容は、皆様の開発業務にどのように活かされているのか、お聞かせください。

伊藤様：私の部署ではペットボトルの設計開発を行っています。開発品と試用品とを比較する際に、QC入門コースで学んだ統計手法を使用しています。物性値の評価や官能評価データの解析などです。



松岡 修平 様

宮田様：私も伊藤と同じ部署ですので、統計を活用する場面で、学んだ内容が活かされています。

谷様：私は炭酸飲料を開発していますが、商品の基本設計を行っています。ペットボトルの飲料は、中身の液体が見える状態なので、使っている原料によって外観の色がばらつきます。研究所で多くのサンプルを作ってデータを集めて統計解析を行い、どこまでなら規格内として商品化できるかを規格値として設定しています。このような場面で、QC入門コースで学んだ統計が役に立っています。

感覚的設計から理論的な設計へ

松岡様：私はコーヒーのレシピを設計しています。多くの人にサンプルを評価してもらい、「これが美味しい／美味しくない」「コーヒー感が強いのはこちら」「甘さが強いのはこれ」といった評価を集めて製品の設計を進めています。統計的に観てこちらのサンプルは甘さが強いから商品のコンセプトに合致している、というような判断を下す際に統計手法を使用しています。

また、自分が様々なサンプルの評価データを採ったときに、「この項目の評価を上げたいが、どうしたらよいかかわからない」という場面で、その項目が他のどの項目と関係が強いのか、統計手法を使いながら設計

することができるようになりました。感覚的に設計する天才肌の人もいますが、分析により理論的に設計することができることをセミナーで学びました。

受講の苦勞を乗り越え、そして得たもの

聞き手：受講時に印象に残ってことや苦勞された点があればお聞かせください。

伊藤様：業務では Excel を使って計算をしていますので、セミナーで久しぶりに電卓を使って計算し、紙に書きました。手計算をすることで、知識があやふやだった部分が認識でき、理解が深まったので、苦勞はしましたが、良かったです。



聞き手：ありがとうございます。QC入門コースでは、統計ソフトのアウトプットをきちんと読み取る力をつけていただくために、手計算での演習にこだわっています。宮田さんはいかがですか。

宮田様：受講した際に、工場で使われるような専門用語が出てきたので理解するのに苦勞しましたが、例題を交えてとても丁寧に解説してもらえました。また、宿題を解くことが知識の定着に繋がったと思います。

聞き手：宿題が負担という声もありますので、これは嬉しいお言葉です。谷さん、松岡さんはいかがですか。

谷様：サンプルから大量のデータ（母集団）を推測するという考え方に、受講当初は戸惑いました。セミナー卒業後は、イメージできるようになりました。

松岡様：私は工場での勤務経験がないので、工場での量産を想定したセミナーの内容に、最初は戸惑いました。例えば、ばらつきを小さくしていこう、ばらつきはどこまでであれば大丈夫か、という考え方です。セミナー受講前は、工場の方が話す用語がよく分かりませんでした。工場でどのような根拠で規格を設定しているのかが受講後に理解できるようになりました。自分で規格を設定する立場からも、とても良かったと思います。

聞き手：ありがとうございます。皆様、苦勞しつつも何かしらの得て、職場で活用されていることは、セミナー主催者としての嬉しい限りです。

最後になりますが、派遣者側として、谷口様から一言お願いいたします。

谷口様：派遣する立場としては、セミナーを受講した者が、（講義で学ぶこと以外に）何かを受け取って帰ってきて欲しいと思っています。そうすれば、会社としてセミナーに派遣した意味があります。

聞き手：本日は貴重なお話をお聞かせいただきまして、誠に有難うございました。